

# 《橘媛》の人生すごろく

解説編



## PROFILE

作者 | 北村四海

制作年 | 1915 年

技法・材質 | ブロンズ

寸法 | 170 × 260 × 30 cm

橘媛は日本神話に登場する日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の妻。日本武尊が東の国に遠せいに行く途中、走水の海（いまの浦賀水道）を船でわたろうとして海が荒れたので、橘媛は日本武尊をたすけるために海に身を投げて神さまの怒りをしずめたと伝えられている。この作品では、海に飛びこんだ橘媛を人魚たちがだきかかえる場面が表現されている。

fig.1 | 『四海餘滴』（1929 年刊）より fig.2 | 文展彫刻陳列室の景『美術新報』第 15 巻第 1 号（復刻版）より  
fig.3 | 旧野村元五郎邸にて（1998 年撮影） fig.4 | 石垣から取り外された《橘媛》（1998 年撮影）  
fig.5 | 修復を終えて搬入される《橘媛》（2014 年撮影） fig.6 | 兵庫県立美術館展示室にて（2015 年撮影）

## INTERVIEW

# 《橘媛》さんに聞きました



イベチャン

イベチャン（以下、イ）：まずはじこしょうかいをおねがいます！

橘媛（以下、橘）：橘媛といいます。1915 年ごろに東京で生まれました。

イ：橘媛さんは神戸の野村さんの家に長く住んでいたんだよね。

橘：はい。お庭でたのしくらせていました。

イ：でも戦争のときは、あやうく連れていかれそうになったんだとか…。

橘：そうなんです。でも体が石がぎにしっかり守られていたおかげでなんとか生きることができました。取りはずすのがむずかしかったんでしょね。

イ：そのあと阪神・淡路大震災もけいけんしたんだよね。

橘：わたしはなんとかぶじだったんですが、お家が取りこわされることになって…。

イ：たいへんだ！

橘：どんどん工事がすすんでいくし、もうダメだと思いました。

イ：ききいばつですくい出されたあと、しばらく大阪のそこうでひっそりくらしていたとか…。

橘：そうなんです。でも、そのそこうも取りこわされることが決まって…。

イ：またまた大ピンチ！

橘：でもそこで、兵庫県立美術館にあずけられることになったんです。2年後には晴れてコレクションの一員にむかえられました。

イ：ようやく落ちつける場所をみつけたんだね！

橘：はい！そのあと、石がきから取りはずされるときにできた傷も手当てしてもらったんです。

イ：どんなふうに手当てしたの？

橘：欠けた部分はあえてそのままにして、体にはりついていたコンクリートを取りのぞいて、展示のための台座を取りつけてもらいました。

イ：それでようやく展覧会におひろめされたんだね。

橘：そうです。展覧会に出るのは、若いころに石こう像だったとき以来でした。

イ：とても注目をあびたんですよ。

イ：いまのお家の住みごちはどうですか？

橘：温度もしつ度もちょうどよくて、かいてきですね。これからもときどき展示室に出てみなさんとお会いしたいです。

イ：ありがとうございました！

野村銀行頭取・野村元五郎  
として1935年に完成。設計者  
は安井武雄。

戦争中、武器をつくるために鉄  
や銅などの金ぞくの多くが国に  
さしだされた。各地の銅像も  
がたを消し、台座だけがのこさ  
れることも多かった。

野村元五郎ってどんなお  
ちだったの？戦争中に銅像が  
消えたってどういうこと？  
気になったらしらべてみよう！



ントチャン

兵庫県立美術館「阪神・淡路  
大震災から 20 年」展（2014 年  
11月22日～2015年3月8日）に出  
品されて話題に。

1915 年の文展（文部省美術展  
覧会）に出品。